



BOOK OF THE WEEK 評者・大森 望

翻訳家・評論家

よならタイノ
サウルス」な

島田流「起転転結」に茫然

自由奔放融通無碍。なんでもあり度がありますます加速する近年の島田ミステリの中でも、今度の『アルカトラス幻想』は別格にすごい。長編でありながら、4つの章それぞれ、小説のジャンルも傾向もバラバラ。とりわけ前半2章と後半2章は空中分解寸前だが、ぐいぐい読ませる力はいささかも衰えず、すべての謎(でもないけど)が解けるエピソードには茫然とするしかない。そ、そんなのあり?

第1章は、1939年11月2日早朝、ワシントンD.C.の森で、木の枝に吊るされた婦人の遺体が見つかる



TEMPO ブックス

アルカトラス幻想

島田荘司 文藝春秋/1995円

場面で幕を開ける。性器の周囲は楕円状に切りとられ、そこから内臓が垂れ下がっていた。次に見つかった女子大生の遺体は、骨盤に無惨な切れ込みが……。全米の注目を集めるこの大事件の捜査が始まったかと思いきや、第2章では一転、恐竜巨大化の謎を考察した、古生物学専攻の院生による論文が長々と引用される。いわく、骨格から判断する限り、アバトサウルスやティラノサウルスは体が重すぎてまともに生活できたはずがない。なぜあんなに巨大化し得たのか? 章題「重力論文」からも察しがつく通り、ここで登場するのが(ソウヤー)さ

でもおなじみの)重力変動説。「当時、地球の重力は今よりずっと小さかった」という奇説の当否はともかく、それを猟奇事件と結ぶアクロバットが島田流。そして第3章「アルカトラス」では、世界でもっとも有名な(数々の映画で知られる)監獄島を舞台に、脱獄ものへと転調。続く第4章では、脱獄した主人公が異世界の島でファンタジーじみた生活を体験する。そして、驚天動地のエピソード。さしずめこれは起転転結ならぬ起転転結か。幻想的な謎とその論理的な解決」という島田ミステリの伝統的な骨格があらぬ方向に巨大化し、まさに重力の軌(みち)を逃れたかのごとく、異様な世界を構築する。島田荘司はまだ止まらない。

十行本棚

マリリン・モンロー 魂のかけら
スリリー・ハッセル他編 井上薫夫訳
青幻舎・2310円

「私にはちゃんと感情がある」。手帳に記された走り書きの文字は本人のものだ。女優としての自分と素顔の自分。その落差を埋めるかのような言葉には、他人を意識しない生々しさがある。演出家の元に保存されていた遺品の中から、没後50年にして初公開された心の声。四〇〇万企業が哭いている

石塚健司
講談社・1575円

平成23年、未曾有の不祥事を受け、特捜検察は抜本的改革で生まれ変わったはずだった。が、果たしてそうか。同年9月に東京地検特捜部が摘発した粉飾詐欺事件を再取材し、検察捜査の欺瞞に鋭くメスを入れつつ、中小企業経営者の苦悩にも光を当てた快作。

私がアイドルだった頃

長谷川晶一
草思社・1890円
元アイドルたちの「今だから言える」インタビュース集。

語るのは少女隊の安原麗子、セイントフォーの濱田のり子、元祖チャイドルの吉野紗香など13人だ。不幸のデパートのような生い立ち。人格無視の現場。壮絶ないじめ。そんな体験も大切にする彼女たちが眩しい。

柿日和
坪内稔典
岩波書店・1785円

柿はなつかしい日本の風景に欠かせない木だ。俳人ネンテン先生が、柿の世界を縦横無尽にたずね歩いたのがこの随筆。漱石のあだ名が「柿」だったことや、柿の実にうまい食べ方、そしてもちろん俳句の季語「木守柿」や「成木實」まで、一冊まるごと柿づくし。

ノンフィクション新世紀

石井光太・編
河出書房新社・1680円
ノンフィクションの現在を知る格好のガイドブックだ。森達也、高木徹らによる連続講座。柳田邦男や鎌田慧などが選ぶベスト30。さらに田原総一朗、猪瀬直樹へのインタビュースも並ぶ。事実の奥に潜む真実をいかにして掘り起こすか。ペンの力、活字の力は侮れない。